

日本におけるアンドレ・マルロー受容

—1941年（昭16）まで—

堀 田 郷 弘

はじめに

本稿は〈アンドレ・マルロー André MALRAUX と日本〉というテーマの研究の最初の稿とするものである。20余年とりわけマルローに興味を寄せ、研究を続けてきた私にとって、マルローにとっての日本、またわれわれにとってマルローとは何か、という問題は最も心を掻き立てられるものである。

マルローは仏作家——その人生をみると単に作家とのみ枠づけできない人物であるが——の中でもとりわけ日本に深い関心を寄せる者である。これまでの四度の訪日に際しての言動、また彼の“文明論” *la culture artistique*⁽¹⁾ともいえる大部の芸術論書にみる日本の捉え方など、それらは彼の関心が決して単なる異国趣味ではなく、日頃彼がよく口にする“文化の多様性” *le pluralisme* とそれを包括する“地球文明” *la civilisation planétaire*⁽²⁾ の観点から、日本に深く心をとらえられていることが分かる。つまり人類にとっての普遍的な価値を日本の中に探求しようとする姿勢、“永遠なる日本” “日本における永遠なるもの” を求めようとしている。

こうしたマルローに対する日本人の関心も、世界の諸国に比して、決して低いものではない。地理的にも言語的にも条件のいい西欧諸国のいくつかと比較

されるほどである。彼を知名にした主な小説——*Les Conquérants*, *La Voie royale*, *La Condition humaine*——は東洋を題材にしているが、その東洋諸国の中では、日本は際立った受容を示している。作家としては、その小説のほとんどが翻訳され、各種の世界文学全集に収められたり、大衆的な文庫版にされたりしている。芸術論者としても、その大部な著書を日本語で読むことができる。政治家としての彼についても、新聞雑誌などによく登場する外国人のひとりといえよう。受容の深さにおいても、マルローらの文学理念を触媒にして起ったといわれる昭和初期の“行動主義文学”の運動⁽³⁾、また最近の日本の芸術論でよくみかけるが、マルローの芸術論の形態および基本的理念である“空想美術館”⁽⁴⁾という考え方などが指摘できよう。

マルローは、恐らく、内なるものからもまた外からも、単に彼を生んだ文明であるフランスという枠だけでなく、世界的な、*planétaire*な視点を要請する人物なのであろう。現在73歳の彼の生涯は、正しくそうした *planétaire*なものが彼を呼び、それに彼が答える応答の生成といえよう。

マルローが *planétaire*な次元に登場するのは1933年のことである。ボワデフルは「1933年、それは *La Condition humaine*『人間の条件』の年である⁽⁵⁾」と書く。ゴンクール賞を与えられたことが逆にこの文学賞の価値を高め、その哲学専門語のような題名が流行語となるほどの大成功を博す。さらにその反響はフランス国内にとどまらず、世界に拡った。翌年には、米、英、伊、オランダ、スウェーデン、ハンガリー、そして日本語に、1936年にスペイン語、1948年に独語へと翻訳された⁽⁶⁾。中国革命という題材と作者の立場が、ファシズム抬頭の当時の世界情勢と相俟って、この傑作を単にフランスの文学的出来事ではなく、世界的な、社会的な事件としたのである⁽⁷⁾。

その後のマルローは、1930年代の進歩的知識人の典型として、その行動は常に人類的な次元で行なわれる。国境を越えた反ファシズム運動——各種の *Comité mondial antifasciste*の指導者、国際義勇軍団 *España* 航空隊長としてスペイン内戦への参加、その芸術的結実である小説および映画 *L'Espoir*『希

望』，第一回ソ連作家会議へ仏代表のひとりとして参加，など。

1945年，第二次大戦の戦士そしてレジスタンスの闘士を経て，戦後のドゴール内閣に入閣し，1969年のドゴール引退まで，文化大臣として，世界的な文化政策——人類的な文化遺産としての〈モナリザ〉，〈ミロのヴィーナス〉の貸出，ヌビア遺跡救出など——を強力に押しすすめた。ドゴール特使の肩書で最初の西欧人として毛沢東（1965）に会見したり，ニクソンが訪中に際し相談をしたり（1972），今日のマルローは *planétaire* な次元でしか捉えようのない人物として，世界が扱っている⁽⁸⁾。

〈マルローと日本〉研究の全体の構成と本稿の位置について一言述べておく。研究は大きく二つの分野に分けられる。一つはマルローのうちにみる日本であり，もう一つは日本におけるマルローである。前者ではマルローの著作にみられる日本を分析し，その文学あるいは広く思想にどのような影響を与えているかを考察しようとするものである。後者では日本においてマルローがどのように受容されているか，とりわけ彼の文学理念がどのように日本文学に影響を与えているかを考察したい。今回は，主にどのような形で受容されて来たかを歴史的にみようとするものであるが，紙面の都合上，戦前までとし，しかも〈行動主義文学運動〉との関係は資料の一端を示すに止まらざるをえなかった。

日本におけるマルロー受容——1941年(昭16)まで

日本では，マルローは，いつ頃から，どのような形で受け入れられてきたか，この章ではそれを述べてみたい。

マルローの作品が最初に日本で紹介されたのは1930年（昭5）である。新居格譯，アンドレ・マロウ著『熱風——革命支那の小説』（東京・先進社，昭和5年9月18日）。昭和39年に，それまでの研究資料調査の結果をまとめてマルローの書誌目を発表した際⁽⁹⁾，この翻訳書を確認，記載したが，その後今日までの他の資料調査によっても，この件が認められる最初のものである。この訳書は *Les Conquérants* 『征服者』の訳である。「原作『征服者』は侵略主義的乃至

軍閥主義的気臭があるの故をもって譯者は『熱風』と改題したのである。征服者と云ひ條、それは民衆の意思の熱風を意味するに外ならないからである。」と訳者は序文で明記している。新居氏が訳に使った本は、背表紙の“by André Malraux”の表示、あるいは序文中で入手の状況を1929年の夏から秋にかけて支那を旅した際、上海南京路のケリー書店で求めた、と説明しているところからして、恐らく1929年の秋にロンドンで出版された Winifred Stephens WHALE による英訳『The Conquerors』からの重訳であろう。満洲事件前夜の日本の知識人の一部の興味の在り方が推察される出版であるが、この訳書の日本における反応は全く確認できない。

丁度この頃在仏中の故小松清氏が *Les Conquérants* を読み、感動して、N. R. F. の美術主任であった作者マルローに面会した。それがマルローに一層日本への関心を深めさせると同時に、小松氏をして、生涯の友マルローの作品を日本に精力的に紹介させる発端となった。

このマルローとの出会のことは小松氏の著作の諸所に記されている。

「1930年のはじめ、寒いパリの冬の或る一日だった。私は、いつも行きつけのモンパルナスのC繪畫研究所で裸體のデッサンをやっていた。……ふと何気なく傍の人をみた。若い女性だった。……かたはらにおかれてあった大きなモロッコ革のハンドバックから一冊の書物を取りだして、膝の上でよみはじめた。緑の表紙は、恐らくグラッセ社の『緑の手帖』叢書ではないか、と思った。……彼女が膝の上にしてゐるのは誰のものだろう。……『征服者』? アンドレ・マルローの『レ・コンケラン』だろうか。」こうして小松氏は彼女フランスワズ・ジレエという画学生から本を借り、感動してマルローを訪ねて行く。

「美術部主任アンドレ・マルローと活字になったネーム・カードがついてゐた。扉を叩くと、神経質なアンドレの肝高い聲がするどく響いて、入って下さい——といった。ぐっと、私は扉をあけた。あけたその瞬間、しばしば寫真でみた彼の俊鋭な、ゴチック彫刻に生うつしの、みるからに苦惱と精神力にみちた悲壯感にあふれる容貌が、眼のまへに強く刻明にうかんできた。……『こんな人間は、はじめてだぞ』と私は思はず心の中で叫んだ。……マルローの視線

は、凝っと私の方にそそがれてゐる。……私は歩をすすめて、彼の方に向かづいた。……彼も私もまだ無言のままである。……マルロオは仕事机から身を起した。……マルロオと私、二人の手はぐっとのびた。固い握手がかはされた。……『マルロオ』とただそれだけ云った。……『君は…』とついに彼は口をきいた。『老子の支那と孔子の支那と、どちらを撰びますかね?』……マルロオと私の初対面は、このやうな對話からはじまった。」⁽¹⁰⁾

1931年(昭6)10月マルローは日本を訪れる。現在まで四度訪日しているが——1958年12月, 1960年2月, 1974年5月⁽¹¹⁾——その最初のものである。

マルローは1930年にパリを発ち、ペルシャ、印度、中国を経て、1931年10月7日朝、クララ夫人と共に神戸港に着く。小松氏と近藤浩一路画伯の出迎えを受ける。京都・奈良の日本芸術を見、大阪では文楽を見たりしている。約3週間後米国まわりで帰国の途につく⁽¹²⁾。

当時の日本側の反応は皆無に等しい。すでに小説『征服者』で西欧では知られていたマルローであったが、日本の新聞記者がつめかけたのは、現時の中国の滞在者としての時局的興味の対象にただけであった⁽¹³⁾。恐らく小松氏の説明によるものと思われるが、新聞の見出しは「フランス文壇の若き寵児 マルロー氏夫妻 けさ神戸着來朝」(大阪朝日新聞, 昭6.10.8.夕刊, 第二面), 「マルロ氏來朝 若きフランスの文人 腹切哲學を説く」(大阪毎日新聞, 昭6.10.8, 第二面)と、作家として扱っているが、とりわけ文壇の反応はなかった。

唯一の反応は、そしてこれは日本で最初のまとまったマルロー文学の紹介であるが、生島遼一氏による『マルロオの文學』が大阪朝日新聞に10月14, 15日と二回にわたって記載されたことである。生島氏のマルロー理解は的確である。「彼の小説が東洋を背景にするといっても、彼はピエル・ロチやゴオガンのやうに、またその多くの亜流のやうに、繪畫的な印象や、歐風化された東洋の神秘主義——といふよりも神秘的な詩情に陶醉するエグゾチスムの作家ではない。……彼は、西歐文化の白光の射通さない、朦朧な野蛮な陰鬱なしかし不思議に力感的な東洋を感じてゐるらしいのだ。……マルロオの<行為>への熱

愛は、くりかへしていへば、彼が冒険を愛するのは、無氣力な焦燥と憂鬱に閉じこめられた現代インテリゲンチヤの生活感情に、新鮮な前景を打開しようといふのだ。そしてそれは藝術家としてばかりでなく、現代の人間としても一つの試みである。」その他 *La Voie Royale* 『王道』のゴンクール賞候補のこと、N. R. F. 誌でのトロツキーとマルローの論戦、などの正確な紹介、さらには在日仏人の反マルロー的反応なども、当時の仏本国の反マルロー状況を既知されている筆致である。

日本の文壇の無反応について、二年後小松氏は親友らしく怒りをぶちまけている。「……日本の文壇は完全にこの名作 (*La Condition humaine*) を看過して仕舞った、一體何が為の海外文學翻譯熱か…」⁽¹⁴⁾、「アンドレ・マルロオやシャドウルヌが日本を訪ねてきたとき、この国のディレクターは彼等の貴族趣味からしてヴァレリヤジイドの遠影にかくれて、これら戦後作家の精神に触れやうとするだけの好奇心を持たなかった。彼等は好んで文學における時代性と地理性を無視することに矜持を抱いてゐる。」⁽¹⁵⁾

マルローの翻訳者の新居格氏さえ「わたしは彼の來たことさへ知らなかった」⁽¹⁶⁾ といっているが、これが象徴していよう。

しかしマルローにとっては、この初めての訪日は大きな収穫となっている。小松氏の証言によれば、「マルロオは三週間餘の日本滞在中『人間の條件』を書き續けていた」⁽¹⁷⁾ そうだが、ゴンクール賞のこの小説の最後の神戸港の章、あるいは主要作中人物 Kyo, また Kama 画伯 (近藤浩一路よりイメージをつくっている) の創作に結実している。また翌1931年に N. R. F. の画廊で近藤浩一路画展を開くことになった。何よりも後の芸術論における法隆寺の壁画をはじめとする日本美術についての考察を深める最初の接触であったことが大きい。

1932年 (昭7) には、『セルパン』4月号、佐藤朔「フランス文芸雑誌の展望」(p. 24) でわずかに“マルロオの「王道」”と寸記されている。

1933年 (昭8) には松尾邦之助が『文藝春秋』11月号でマルローを寸評、また高橋廣江は「*Erotisme* について」でマルローの「チャタレイ夫人の恋人」仏訳本序文にふれている⁽¹⁸⁾。

1934年は初めて本格的なマルローの訳書が出（邦訳書誌参照）、また前年のゴンクール賞の華やかなニュースと大成功を博した『人間の条件』によって文芸誌の一部に作家マルローが紹介され始める。一方ヨーロッパにおけるマルローの反ファシズムの精力的な活躍や、左翼人にとっては大きな文学的事件である第一回ソ連作家会議（1934. 8. 17～31）での活動によって“行動作家マルロー”が紹介される。とりわけ昭和8年10月に創刊された雑誌『行動』の昭和9年からの思想的基盤と見られる“行動的ヒューマニズム”“能動精神”とマルローおよびフェルナンデスの文学思想との関連性に注目せねばならない。これは詳細な分析を要する問題であるので、詳しくは別の機会にゆずりたい。

まず『人間の条件』のゴンクール賞受賞についての反応は、小松氏の『ゴンクール賞の受賞者、アンドレ・マルロオのこと』（『文藝』改造社、昭9.2）を初めとする『文藝』4月号の『フランスの文藝雑誌』、9月号の『クロワッセエに託言して』、『セルパン』誌5月号のシャドユルヌの朝日講堂における講演の紹介、7月号『マルロオと行動の文學』など、また伊吹武彦『孤独なる動乱—マルロオの小説〈性命〉について』（『文藝評論』2月）がある。また新村猛氏は『美・批評』10月号の『マルロオとフェルナンデス』で反ファシスト作家マルローの面を主として紹介している。その他ほとんど名のみふれているものが認められる⁽¹⁹⁾。

いずれもこの小説の新しさを語っているが、日本では、諸国がきそって翻訳した西欧のような爆発的反応はない。しかし佐藤朔の抄訳によって大雑誌『中央公論』1934年2月号に紹介されている。

小松氏による改造社版の『征服者』（1934）は、初めて仏原書から訳出されたマルローの作品である。1932年以来翻訳にとりかかっていたものである。この訳書についての反応は不明であるが、調査した限りでは、文芸誌で言及したものはない。この後1936年（昭11）までマルローの訳書は出版されない。

反ファシスト作家としての活動の面が日本で紹介されるのは、前掲の新村氏（高杉焔の筆名で）が最初であるが、1935年～36年にかけて新村氏は更にソ連

作家会議、文化擁護作家委員会、総会を、主として『世界文化』誌において紹介し、マルローの活動を知らせている。また小松氏も文化擁護作家連盟の活動について全貌を紹介している⁽²⁰⁾。

1936年7月のスペイン内乱は世界中の知識人にとって大きな問題であったが、日本でも幾つかの総合雑誌、新聞が報道を大々的にしているせいか、内乱におけるマルローの活躍を中心として、かなり言及されることが多くなっている。マルローは共和派の資金集めのため北米各地を講演旅行したが、その講演『*Forging Man's Fate in Spain*』やトロツキーとの論争が、『中央公論』(昭12.6)、『セルパン』(昭12.5.6.9)に特集的に記載されている。またスペイン内乱の文学創造の最大の傑作といわれる *L'Espoir* 『希望』も、実際の参戦者マルローの現地報告的なものとして、瀧口修造氏によって、N.R.F. 誌記載の一部が『セルパン』(昭13.1)に抄訳されている⁽²¹⁾。

こうした時事的な関心の中に言及されるマルローにひきづられるように、その作家としての面もようやく言及の頻度が多くなって来た⁽²²⁾。

作品は、『人間の条件』がまず小松氏の、そして新庄嘉章氏の抄訳、そして1938年(昭13)に改造社の<大陸文學叢書3>『上海の嵐』として小松・新庄共訳で完訳が出される。『王道』は1936年(昭11)に第一書房から小松氏の訳で出版された。1935年に発表された *Le Temps du mépris* も、1936年(昭11)福永英二氏によって抄訳され、その直後第一書房から小松氏の完訳『侮蔑の時代』が出版されている。『希望』は前掲の瀧口抄訳の後、新庄抄訳(1936)がでる。完訳は大戦後を待たねばならない。

ここで注目すべきは、1938年(昭13)に初めて美術論者としてのマルローが瀧口修造氏によって紹介されたことである。後に大著『芸術の心理』に組込まれる一部が『セルパン』誌に訳出されている。思想を避けてのことだろうか。

1939年～1945年のマルローは参戦、抵抗運動の危険の中でさえ *Les Noyers de l'Altenburg* を執筆、ゲシュタポの手をのがれた一部を出版する(1943)。日本では1941年～1945年までは全体的な文学休息の時期である。とりわけソ連を

“人類の正義の夢の糧”とした30年代の左翼知識人の典型として日本に紹介されたマルローは、大政翼賛文学体制下では、全くの白紙に返されてしまった⁽²³⁾。

1945年、戦後マルローはドゴール臨時内閣の閣僚として、大作家に政治家の姿を加える。更に芸術論の大著を次々と刊行し⁽²⁴⁾、芸術論者としても名声を立てる。日本において、戦後逸早く世界の文学情報の受容口となったのは、昭和21年創刊の京都の『世界文学』誌である。東京では翌22年に創刊された『ヨーロッパ』誌である。とりわけマルローに関係深いのは、鎌倉文庫刊の后者である。小松清氏は同社から、恐らくマルローの小説全集を企していたのであろう、『征服者』、『王道』、『侮蔑の時代』を出版、さらには同社の別の雑誌『人間』に姫田氏と共訳で『希望』の連載をする。世情の落ち着きと共にマルローの紹介が着実にすすめられる。マルロー第二の訪日(1958, 昭33)までには、小松氏によって、芸術論のほとんどが訳出されている。大学における本格的なマルロー研究もあらわれ始めた。

戦後のマルロー受容についての詳しくは次の機会にゆずりたい。

マルローの著作の邦訳書誌——1974年(昭49)まで

本章は、マルローの著作の発表年順に、各著作毎に訳をまとめた。翻訳は、発表年、訳題、訳者、出版社、あるいは誌紙や他の単行本の場合は「 」が誌紙名、『 』が書名とした。誌紙の場合は発行月、号数、頁の順に細目を記した。訳題の「 」は誌紙、『 』は単行本を示す。

La Genèse des Chants de Maldoror (1920. 4)

1962 「マルドロールの歌の起源」堀田郷弘訳、「フランス文学手帖」秋季第2号、25～29頁。

Lunes en papier (1921)

1962 抄訳「紙の月、第三章・勝利」堀田郷弘訳、「フランス文学手帖」夏季創刊号、10～16頁。

1974 「紙の月」岩崎力訳、「海」7月号、152～175頁。

La Tentation de l'Occident (1926)

1955 『西欧の誘惑』小松清・松浪信三郎訳，新潮社〈一時間文庫60〉。

1962 『西欧の誘惑』小松清・松浪信三郎訳，筑摩書房〈世界文学大系59〉。

D'une jeunesse européenne (1927)

1962 「ヨーロッパのある青年層について」堀田郷弘訳，「フランス文学手帖」秋季第2号，15～25頁。

Les Conquérants (1928)

1930 『熱風』新居格訳，先進社。

1934 『征服者』小松清訳，改造社，1947年鎌倉文庫，1950年三笠書房〈世界文学選書〉，1952年〈新潮文庫〉，1954年河出書房〈世界文学全集19〉，1962年筑摩書房〈世界文学大系59〉。

1962 『征服者』長塚隆二訳，〈角川文庫〉。

1964 『征服者』沢田閏訳，中央公論社〈世界の文学41〉。

L'Imposture, par Georges Bernanos (1928)

1963 「カトリック作家・ベルナノスの小説技法」堀田郷弘訳，「フランス文学手帖」春季第3号，32～35頁。

Contes, historiettes et fabliaux, par le marquis de Sade (1928)

1962 「マルキ・ド・サド考」堀田郷弘訳，「フランス文学手帖」夏季創刊号，16～17頁。

Notes sur l'expression tragique de Rouault (1929)

1949 紹介「絵画における人間復活」小松清訳，「アトリエ」275号，45～50頁。

La Voie royale (1930)

1936 『王道』小松清訳，第一書房〈フランス現代小説〉双書，1948年鎌倉文庫，1951年三笠書房〈マルロオ選書〉，1952年〈新潮文庫〉，1953年新潮社〈現代世界文学全集23〉，1961年筑摩書房〈現代名作全集36〉。

1962 『王道』安東次男訳，平凡社〈世界名作全集35〉，1962年〈角川文庫〉。

1964 『王道』川村克己訳，中央公論社〈世界の文学41〉。

1970 『王道』滝田文彦訳，新潮社〈新潮世界文学45〉，1970年〈新潮文庫〉。

Réponse à Léon Trotsky (1931)

1935 「トロツキーに答う，アンドレ・マルロー」小松清訳，『行動主義文學論』（紀伊國屋出版部）

Lawrence et l'érotisme (1932)

1935 「D. H. ロレンス論，チャタレー夫人の戀人について」小松清訳，『行動主義文學論』（紀伊國屋出版部），1950年改訳「文芸」11月号。

La Condition humaine (1933)

1934 抄訳「1927年3月21日」佐藤朔訳，「中央公論」2月号，341～6頁。

1935 抄訳「人間的條件」小松清訳，「セルパン」2月号，141～7頁。

1936 抄訳「人間の條件」新庄嘉章訳，「行動文學」7月号。

1938 『上海の嵐』小松清・新庄嘉章訳，改造社〈大陸文學叢書3〉

1950 『人間の條件 上，下』小松清・新庄嘉章訳，創元社〈20世紀文學叢書〉，1951年〈新潮文庫〉，1951年三笠書房〈マルロー選書〉，1953年新潮社〈現代世界文學全集23〉，1963年新潮社〈世界文學全集33〉，1970年新潮社〈新潮世界文學45〉。

L'art est une conquête (1934)

1935 「ソヴェット作家會議の演説」小松清訳，『行動主義文學論』（紀伊國屋出版部）

L'Interview à "Literatournaïa Gazeta" (1934)

1936 抄訳「社會主義的リアリズムのために」山村房次訳，「セルパン」5月号，82～83頁。

L'Attitude de l'Ariste (1934)

1935 要旨「パリにおける全ソ作家大會報告會」新村猛訳，『國際反ファシズム文化運動』（三一書房）。

Le Temps du mépris (1935)

1936 抄訳「侮蔑の時代」福永英二訳，「セルパン」4月号，135～141頁。

- 1936 『侮蔑の時代』小松清訳，第一書房<フランス現代小説>双書，1948年鎌倉文庫，1950年新潮社<新潮文庫>。

Sur l'héritage culturel (1936)

- 1936 抄訳「文化遺産の問題」内山敏訳，「文藝」11月号，100～8頁。

Writers in Politics—interview avec Henri Lefèvre (1936)

- 1936 「人民戦線と作家」記者不明，「セルパン」9月号，104～5頁。

Forging Man's Fate in Spain (1937)

- 1937 「スペインでは人間の条件が鍛へられてゐる」小松清訳，「中央公論」6月号，436～9頁。

- 1937 「人間の運命と鍛錬場，スペイン」福永英二訳，「セルパン」5月号，78～81頁。

Trotsky vs Malraux (1937)

- 1937 「スペイン問題をめぐるトロツキイとマルロオの論戦」小松清訳，「中央公論」6月号，436～9頁。

- 1937 「トロツキイの攻撃に答ふ，アンドレ・マルロオ」福永英二訳，「セルパン」6月号，62～63頁。

This is War (1937)

- 1937 「小説・これが戦争だ」，「セルパン」9月号，136～142頁。

L'Espoir (1937)

- 1938 抄訳「希望—スペイン挿話」瀧口修造訳，「セルパン」1月号，142～150頁。

- 1939 抄訳「スペインの悲劇」新庄嘉章訳，「中央公論」5月号，336～351頁

- 1946 「希望」小松清・姫田嘉男共訳，「人間」8，9，10，11；1947年1，3月；「評論」小松訳，1945年5，6，7，9，10（第二篇まで）。

- 1949 『希望・I』小松清訳，河出書房，1951年三笠書房<マルロオ選集>，1953～54年新潮社<現代フランス文学叢書>（全訳），1962年河出書房新社<世界文学全集41>。

- 1970 『希望』岩崎力訳，新潮社<新潮世界文学45>，1971年<新潮文庫>。

De la représentation en Occident et en Extrême-Orient (1938)

- 1938 「西洋と東洋との再現について」瀧口修造訳, 「セルパン」12月号, 30~33頁。
- 1940 「藝術の條件—藝術の心理について」高橋廣江訳, 「中央公論」2月, 300~315頁; 「藝術の生成—東西の宗教藝術」『文化と風土』青光社。

Les Noyers de l'Altenburg (1943)

- 1951 抄訳「シャルトルの収容所」小場瀬卓三訳, 『祖国は日夜つくられる・II』日旺書房。
- 1964 『アルテンブルグのくるみの木』橋本一明訳, 中央公論社<世界の文学41>。

Esquisse d'une psychologie du cinéma (1944)

- 1957 抄訳「マルロー<映画心理素描>」波多野完治訳, 『映画の心理学』新潮社。
- 1966 「映画心理学素描」橋本一明訳, 「季刊・世界文学」春号, 148~59頁。

L'Occident et l'Héritage planétaire (1945)

- 1948 「アンドレ・マルロー会見記, 迷路紙のインタビュー」白井浩司訳, 「ヨーロッパ」2巻3号, 34~39頁。

Otage-Exposition de Fautrier (1945)

- 1959 「人質について」大岡信訳, 「南画廊フォートリエ展カタログ」。

L'Espoir, film d'André Malraux (1946)

- 1948 抄訳「希望, アンドレ・マルローの映画」小松清訳, 「ヨーロッパ」2巻3号, 25~33頁。

L'Homme et la Culture artistique (1946)

- 1952 「人間と芸術」桑原武夫訳, 『現代文化の反省』<岩波現代叢書>, 109~129頁。
- 1971 編註『A. マルロー: 人間と芸術』堀田郷弘, 三修社。

Psychologie de l'Art-I-Le Musée imaginaire (1947)

- 1949~51 「東西美術論・I・空想の美術館」小松清訳, 「芸術新潮」に連載。

1951 抄訳「芸術の心理—空想美術館」吉川逸治訳、『アンドレ・マルロオ』新樹社，119～158頁。

1958 『東西美術論 1・空想の美術館』小松清訳，新潮社。

L'Appel aux intellectuels (1948)

1962 「征服者・あとがき」小松清訳，筑摩書房〈世界文学大系59〉。

1962 「征服者・後記」長塚隆二訳，『征服者』〈角川文庫〉。

1964 「征服者・追記」沢田潤訳，中央公論社〈世界の文学41〉。

Psychologie de l'Art・II・La Création artistique (1948)

1951～54 「東西美術論・II・芸術的創造」小松清訳，「芸術新潮」に連載。

1958 『東西美術論 2・芸術的創造』小松清訳，新潮社。

The Case for De Gaulle (1948)

1950 抄訳「非共産主義左翼，マルローとバーナムとの対談」秋沢修二訳，「中央公論」7月号，49～61頁。

Psychologie de l'Art・III・La Monnaie de l'absolu (1949)

1954～56 「東西美術論・III・絶対の貨幣」小松清訳，「芸術新潮」に連載。

1959 『東西美術論 3・絶対の貨幣』小松清訳，新潮社。

Saturne, Essai sur Goya (1950)

1967～68 「ゴヤ論」竹本忠雄訳，「芸術新潮」に連載。

1972 『ゴヤ論—サチュルヌ』竹本忠雄訳，新潮社。

Lettre à M. Komatsu Kiyoshi (1950)

1950 抄訳「日本の友へ」小松清訳，「評論」1月号，9～17頁。

Le Musée imaginaire de la sculpture mondiale・I・La Statuaire (1952)

1956～57 「世界の彫刻・空想美術館序説・第一巻 彫像」小松清訳，「芸術新潮」に連載。

Sur la Liberté de la Culture (1952)

1956 「演説家アンドレ・マルロオ」小松清訳，「ボワデフル著アンドレ・マルロオ」〈新潮文庫47〉，131～145頁。

Préface de "Qu'une larme dans l'océan" par M. Sperber (1952)

1956 「序文作家アンドレ・マルロオ」小松清訳、『ボワデフル著アンドレ・マルロオ』〈新潮文庫47〉, 147~156頁。

Le Musée imaginaire de la sculpture mondiale・II・*Des bas-reliefs aux grottes sacrées* (1954)

1957~58 「世界の彫刻・第2巻 聖洞窟の薄浮彫」小松清訳,「芸術新潮」に連載。

Le Musée imaginaire de la sculpture mondiale・III・*Le Monde chrétien* (1954)

1958~59 「世界の彫刻・第3巻 キリスト教の世界」小松清訳,「芸術新潮」に連載。

La Métamorphose des dieux, tome I (1954)

1859~62 「神々の変貌・第一巻」小松清訳,「芸術新潮」に連載。

La Condition humaine, adaptation théâtrale de Thierry Maulnier (1955)

1956 『戯曲・人間の条件』小松清訳,河出書房,1959年中外書房。

Dialogue, André Malraux et Komatsu Kiyoshi (1958)

1958 「対談アンドレ・マルロー氏と小松清氏」読売新聞12月12日夕刊。

Conférence de presse tenue à Tokyo (1958)

1958 「マルロー特使の記者会見」朝日新聞12月11日。

Hommage à la Grèce—conférence à Athènes (1959)

1960 「世界文明への道」竹本忠雄訳,「三田文学」3月号,69~70頁。

Conférence à Brésilia (1959)

1960 「世界文明への道」竹本忠雄訳,「三田文学」3月号,72~76頁。

Conférence à l'Inauguration de la Maison Franco-Japonaise (1960)

1960 抄訳「アンドレ・マルロオ氏演説」前田陽一訳,「日仏文化技術通信」3-4月合併号,1~4頁。

1960 「地球文明の誕生」竹本忠雄訳,「人間専科」7月号,96~99頁。

1961 「日仏会館開館式での演説」堀田郷弘訳,「近代批評」12号,64~5頁。

L'Interview à l'aéroport de Hanéda (1960)

- 1961 「マルローに聞く」堀田郷弘訳、「近代批評」12号、65～70頁；〈世界名作全集35〉月報（平凡社）、1～3頁。

L'Art mondial est son indivisible héritage (1960)

- 1971 「地球文明の誕生」堀田郷弘訳、「黎徨」2号、1～7頁。

Préface—Sumer, par André Parrot (1960)

- 1962 抄訳「マルロオの序文より」青柳瑞穂訳、「芸術新潮」2月号、10頁。

- 1965 「マルロオの序文」青柳瑞穂訳、『シュメール』新潮社〈人類の美術〉

Discours de l'art nègre (1966)

- 1966 要約「第一回世界ニグロ芸術フェスティバル・マルローの講演」竹本忠雄訳、「芸術新潮」7号月、146～8頁。

Antimémoires (1967)

- 1970 抄訳「反回想録」竹本忠雄訳、「芸術新潮」に6回連載。

André Malraux talks to Roger Stéphane (1968)

- 1969 抄訳「第三文明への一つの視角」潮「潮」春季別冊、183～9頁。

Les Chênes qu'on abat... (1971)

- 1971 『倒された櫨の木』新庄嘉章訳、新潮社。

Our Civilization in Crisis—interview (1974)

- 1975 抄訳「危機にさらされた文明」リीडァーズダイジェスト」1月号、55～60頁。

La tête d'obsidienne (1974)

- 1974～ 「ピカソ回想」竹本忠雄訳、「芸術新潮」8月号より連載中。

L'Interview par Taro Okamoto (1974)

- 1974 「対談・アンドレ・マルロー／岡本太郎、世界芸術の運命」、「芸術新潮」1月号、86～98頁。

Conférence du 16 mai à la Salle de Conférence de Asahi-Sinbun-sha

- 1974 要旨「アンドレ・マルロー氏講演」朝日新聞」5月7日夕刊5面。

Colloque à Kyoto (1974)

- 1974 「アンドレ・マルローをかこむ京都シンポジウム」週刊朝日」6月

7日号と6月14日号。

André Malraux vs Ikeda Daisaku (1974)

1974 「アンドレ・マルローと池田大作・特別対談」竹本忠雄・本多真知子
訳, 「潮」7月号, 86~111頁。

(未完)

〔註〕

- 1) ユネスコ主催の講演『L'Homme et la Culture artistique』(1947)を参照。
- 2) 1960年の東京日仏会館開館式での講演: 拙訳『アンドレ・マルローに聞く』(『近代批評』12号1961.3), 及び『L'Occident et l'Héritage planétaire』(1945年のインタビュー)を参照。
- 3) 小松清『行動主義文学論』(昭10), 雑誌『行動』(昭8.9~10.9)を参考。
- 4) 拙論『アンドレ・マルローの美学の研究』(早大文学部「ヨーロッパ文学研究」1号, 昭36), 及び『アンドレ・マルローの“空想美術館”の理念について』(早大大学院文学研究科紀要, 9輯, 昭38)を参照されたい。
- 5) Pierre de Boisdeffre: André Malraux (Eds. Universitaire, 1955), p. 21.
- 6) 各国訳については Bibliothèque Nationale de Paris で確認したもの。詳しくは堀田編『アンドレ・マルロー書誌目の試み』(『アカデミア』1964.7)を参照。
- 7) その最も典型的なものは, トロツキーの反応である。詳しくは, 小松清訳になる“La Révolution étranglée”(前掲の『行動主義文学論』収録)及び小笠原真一『マルロオとトロツキー——「人間の条件」をめぐる——』(中央大文学部紀要, 31号)を参照されたい。
- 8) マルローの生涯については, 村松剛著『評伝アンドレ・マルロオ』(新潮社, 昭47), 横塚光雄著『アンドレ・マルロオ』(紀伊国屋新書, 1973)が邦文の詳しいものである。
- 9) 註6)の書誌目。
- 10) 小松清: 人間マルロオ(『アンドレ・マルロオ』現代フランス作家叢書II, 新樹社, 昭26)の「I・マルロオを知る」。p. 161~179.
- 11) 1958年, 1960年は文化使節として, 1974年は国際交流基金団の招きで来日。
- 12) 天津出航の大阪商船長安丸で雨の神戸港に着く。詳しくは小松清の註10)の書の「II・神戸での再会」に記されているが, 主な目的は仏での日本美術展の企画であった。
- 13) 記者会見は, ほとんど満州事変についてであったが, 大阪毎日の記事中「支那はどうみても国家の価値をもっていない, 将来は階級的にわかれるかも知れないが日本がこのまようまく軍隊を備へて置けば第二の朝鮮になるだろう」とマルローの言葉が引用されているが, 恐らくは記者の間違いであろう。“はらきり論”については, 彼の日本観の一端として重要である。1960年来日の際質問状を出して回答をえたが, 註3)の文, および拙文『作家大臣マルロオと日本武士道』(『世界と日本』誌昭36年11月号)を参照されたい。
- 14) 小松清「ゴンクール賞の受賞者, アンドレ・マルロオのこと」(『文芸』改造社刊, 昭9.2月号)p. 121.

- 15) 小松清「クロワッセエに託言して」(『文芸』昭9.9月) p. 151.
- 16) 新居格「逢ったことのある外国の作家, 批評家」(『行動』昭9.9月) p. 79
- 17) 註14)と同文中。
- 18) 松尾邦之助「ふらんす文壇左…右…」, 高橋廣江『文化と風土』(青光社, 昭15)
- 19) 『セルパン』7月号の春山行夫の「七月の世界文学」(p. 75), 『行動』9月号の新居格など。伊東鋭太郎の『行動』(昭10.2)の文など読物的な紹介もある。
- 20) 『世界文化』2月号に全ソ作家大会, 3月号にパリにおける全ソ作家大会報告演説会, 6, 9月号に第一回文化擁護国際作家大会, また1936年の1月号にはエチオピア問題, 3月号にはロマン・ローランの70才記念会などを新村氏は紹介している(参照・新村猛著『国際反ファシズム文化運動——フランス篇』第一書房, 昭23)。小松清氏は第一書房から『文化の擁護』を出版している。その他在ソのマルローについて『セルパン』昭10.4で「マルロオと水夫」, 昭11.5にソ連文学新聞の会見記の紹介, またマルローが中心的プランを練った文化擁護国際作家連盟のロンドンにおける書記局総会については『文学評論』などの左翼系の誌紙が紹介している。
- 21) 5月号では“スペイン現地の報告・アンドレ・マルロオ”という見出しで「人間の運命と鍛錬場, スペイン」(p. 78—81), またパリ特派員福永英二氏による「スペインから帰ったマルロオと語る」(p. 82—85), 6月号では「トロツキイの攻撃に答う, アンドレ・マルロオ」(p. 62—3), 9月号では「小説・これが戦争だ。アンドレ・マルロオ」(p. 136—142)と「スペイン文化擁護国際作家会議報告」(p. 84—88)が記載されている。当時の大雑誌『改造』ではほとんど記載されていないのが不思議である。また新村氏は『世界文化』9月号で戦時下のスペインで開催された文化擁護作家会議を紹介している。
- 22) 1936年小松清「マルロオへの手紙」(『新潮』11月)と「ジイドは北へマルロオは南に」(『文芸』9月), 新庄嘉章「フランスの左翼作家の作品」(『新潮』11月; 1937年小松「報告文学の意義」(『新潮』5月), 新庄「マルロオの見た支那」(『新潮』11月); 1938年新庄「解説・アンドレ・マルロオ」(『文芸』9月); 1939~40年には『新潮』の〈海外文藝短信〉にしばしば登場させられる。また井伏鱒二の小説「佛人マルロオ南部藩取調聞書」(『新潮』7月)の主人公の姓は珍しく“マルロオ”と命名されている。
- 23) 太平洋戦争前夜の1940年(昭15)には、『文芸』11月号で, 津田逸夫「『テルエルの山』——アンドレ・マルロオの映画」(p. 152—7)を書き, 小松氏とパリの映画試写会に出席し, 感動をうけ, “マルロオの映画を見る会”の計画を語っている。
また小松氏は昭14~15年にかけて『中央公論』誌などに幾篇かの“巴里通信”を寄せ, 戦時中のマルローによく言及している。
- 24) 註6)の書誌目p. 92—103を参照されたい。

N. B. 参考文献は本文及び註で参照した全てのものです。リストの不備についてはご教示をお願いする次第です。(1975. 6. 1)